

エデュコ Educco

地球時代の教育情報誌

No.33
2014年冬



山口香さん

柔道家

巻頭インタビュー p.2

知っておきたい教育 NOW p.4

「校務の情報化」の今日的な考え方
持続可能性の高いICT活用から取り組む

きょういく見聞録 p.8

「ことば文化都市」伊丹の「言葉おこし」
～「読む・書く・話す・聞く」を基本とした「ことば科」の授業～

地球となかよしトピックス p.10

学校が地域をつなぐ スクール・コミュニティ
福島県伊達市保原小学校

インフォメーション 北から南から p.12

第11回 地球となかよしメッセージ入賞作品発表 p.14

地球となかよしゼミナール p.18

響け！復興のハーモニー
支援を明日への力にかえて踏み出す一歩
宮城県吹奏楽連盟

コラム 疑似科学とのつきあいかた p.19

ほっとな出会い p.20

NPO法人「カタリバ」代表理事 今村 久美さん

スポーツも勉強も、自らの判断に責任をとれる大人になるためのウォーミングアップです。

柔道家・筑波大学准教授 **山口** **香**さん



PROFILE

1964年東京都豊島区生まれ。筑波大学大学院修了。筑波大学人間総合科学研究科准教授。1978年第1回全日本女子体重別選手権大会（50kg級）で優勝。以後、同大会10連覇。世界選手権では、4個の銀メダルと、日本女子として初の金メダルを獲得。1988年ソウルオリンピック銅メダル。翌年現役引退、指導者として活動。現在、JOC理事、東京都教育委員を務める。

女子の柔道が一般的でなかった時代に柔道を始められました。

小学校1年から柔道を始めました。「姿三四郎」というテレビドラマに影響されて、軽い気持ちで始めました。道場で、女子は一人だけ。先生が、とにかく柔道大好き人間で、教えたくてしょうがない。休むと、「今日はどうした」と電話がかかってきて、言い訳するのが大変だから、毎日行くほうが楽で（笑）。先生の柔道好きにはまった感じですね。私にとつての柔道の魅力は、勝ち負けではありません。女子の試合が始まったのは、私が13歳の時ですから、試合で勝つことを目標として練

習を続けていたわけではないんです。今日は昨日より技がきれいに決まった、といった、積み重ねてきたものによる達成感、自分に対する発見というところにあります。勝ったから、それで完璧、というものではないんです。

引退後は、指導者として活動してこられました。選手たちにどのように接しておられるのですか。

スポーツの指導者には、とにかく勝たせることがいちばんという考えの人もいますね。ここまでやらせない、この子たちは達成感を味わえないんだと、価値観を押しつける指

導になりがちです。

選手が勝ちたいと思うならば、選手自ら努力して、技術や能力が向上するようにサポートするべきだと、私は思います。勉強でも、自分で苦労して解き明かすから力がつき、受験合格も価値をもつのであって、ただ答えを教えるだけでは、将来、子どもの中には何も残りません。ある程度は押し上げてあげることも必要かもしれませんが、最終的には、自分でつかんでいかないといけないのです。私が、選手と指導者、どちらも体験して思うのは、どうしたらベストなのかは、その場で試合している本人にしかわからないということです。指導者がいくら専門家であったとしても、決断できるのは、本人だけです。

人生は、迷いの連続です。大人は常に、どうすべきかの判断をし続けなければならない。起こした行動については、自分で責任をとるというのが社会です。スポーツも学校の勉強も、将来、自力で生きていくためのウォーミングアップなんです。

勝者を美化しすぎる風潮はよくないですね。勝ったこと自体は素晴らしい。でも、勝った者がいちばん頑



張ったわけでもないし、人間的にいちばんすぐれているわけでもありません。勝ち負けという物差しだけなら、では一人だけしか頑張らなかつたのか、となりますよね。私自身、勝った側でしたが、もともとスタートも相手の巡り合わせも異なるなかでの、偶然の産物だと思っています。私より頑張っていた人はたくさんいます。

努力は、勝ったことよってのみ報われるわけではありません。努力したことのほうが大事だし、努力した成果を、自分で実感できることが大切なんです。もちろん、子どもの勝ちたいという気持ちを止める必要はありませんが、指導者が、同じ視点で舞い上がってしまうのはよくない。勝負の結果だけを評価するより

は、自分自身がどれぐらい努力して、どれぐらい満足し、成果が上がったのか、自分の内面と向き合うことができる子を育てる指導の仕方がいいのではないかと思っています。

柔道界も含め、スポーツにおける体罰や暴力が問題になり、積極的に発言をされました。

挨拶や柔道の礼など、形から教えて、子どもは後から意味がわかってくるというものもありますが、問題は、体罰をその延長だととらえることです。スポーツ界に体罰が目立つのは、スポーツは体を動かすものだから、何でも体に覚えさせれば効果がある、と思いついてるからでしょう。

本当に体罰に効果があるのであれば、芸術や学問など、あらゆる分野でなされているはずですが、体罰がなくても、他の分野では超一流の人が育っているということは、体罰が誤りだと認めるべき証拠でしょう。

体罰は、ドーピングに匹敵するものだと私は思います。子どもも指導者も、体罰という薬物によって、高揚したり、叩かれてびりっとしたりする。その高揚感を覚え、それが習

慣になってしまつと、その成功体験がなくては何もできなくなつてしまう。麻薬と一緒ですよ。

一昔前は、指示されたことを、繰り返し返し、がまんしてやる、そういう人材も必要だったでしょう。しかし今、ルーティンの仕事は、ほぼ機械化されています。これからの時代、子どもたちに求められるものは、無から何かを生み出す力です。スポーツも同じ。従順であることをよしとし、体罰や精神論で押さえつけるやり方では、新しい発想、柔軟な考えで新しいもの、技をつくり上げる能力は育たないでしょう。

そして、指導者全員、保護者なども含めて、チームの皆が皆、同じ方向を向くのは危険です。いろんな考えの人間がいて、いろんな意見を聞く耳をもつことが、いいチームをつくり上げていくことになります。多様性を尊重することが、うまく行かなかつた時の、早い軌道修正につながります。風通しをよくして、異なる意見を言うことのできる雰囲気をつくっていく。このマネジメントスキルが、これからの指導者に求められることだと思います。

将来世代のために、指導する立場の者が心がけるべきことは何でしょう。

スポーツ界だけではなく、社会の中でも、上意下達、問答無用なところはたくさんあります。目上の人を敬う、経験値を大切にするという古きよき伝統文化を尊重すべき場面はもちろんあります。しかし、変えていくべきところは変えていこうと。たとえ目上でも、自分の考えていることをきちんと相手に伝える、自己表現することも大切だという共通認識を私たちが本気で持たなければ、グローバル社会で、日本はまちがいに置かれていかれます。

ものが言える子、自分のやり方を試そうとする子が、もつといていい。指導者は、自分のやり方に、それは違うのではないかと言われたら、やはりむっとしますよね。私だつてそうです。でも、そこで「聞く耳」をもつことが大切です。子ども、選手が自分の考えを言える雰囲気づくりを心がけることが、これからの社会で活躍する子を育てるうえで必要だと考えています。

教え子が、自分の指導、考えの範疇を超えることこそが、指導者冥利に尽きることだと思うんです。☺

※ 2012年12月、選手15人が女子日本代表監督らの暴力・ハラスメント行為を告発。山口さんは相談を受け、選手たちが自ら訴え出る行動をサポートした。

「校務の情報化」の 今日的な考え方



玉川大学教職大学院
教授 堀田 龍也

「校務の情報化」とは

「校務の情報化」とは、子どもたちの評価・評定などの成績情報や、生徒指導上の情報、保健発育に関する情報などの、教員が取り扱うさまざまな事務的な業務を、コンピュータを用いて効率化することによって、教員の事務負担を軽減し、子どもと向き合う時間を確保しようというものである。

平成22年に発行された文部科学省「教育の情報化ビジョン」には、「学校における校務の情報化は、教職員等学校関係者が必要な情報を共有することによりきめ細かな指導を可能とするとともに、校務の負担軽減を図り、教員が子どもたちと向き合う時間や教員同士が相互に授業展開等を吟味し合う時間を増加させ、ひいては、教育の質の向上と学校経営の改善に資するものである」と示されている。

また、校務の情報化が対象とする具体的な内容については、「学籍・出欠・成績・保健・

図書等の管理」を最優先に挙げている。

さらに、管理職に対して「校務の情報化を学校経営の中核として位置付け、教職員間でその意義の共有に努めることが求められる」としている。これまでは、校務の情報化も校務分掌の一つとみなし、コンピュータに堪能な教員に丸投げしていることもあっただろう。しかしこの文言は、校務の情報化は学校という組織の経営上の課題であり、管理職がイニシアチブをとるべき重要な案件であるということを強く認識させるものである。

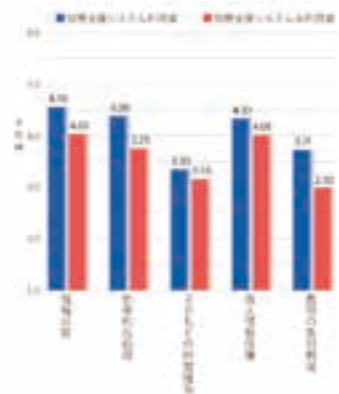
「校務の情報化」で共有されるデータ

では、校務の情報化のために、教職員が共有しなければならぬデータとは、具体的にどのようなものだろうか。限られた予算の中で校務の情報化を推進する場合に、どのデータを共有することを急ぐべきだろうか。

「教育の情報化ビジョン」に示されているように、もっとも急ぐべきデータは、学籍デー

●校務支援システムによって期待される効果

校務支援システムの機能に関する調査 平成23年5月実施 校務情報化支援検討会



すべての項目で校務支援システムの利用者が未利用者より平均値が高かった。特に「教師の負担軽減」「効率的な処理」「情報共有」が改善されると考えられる。

タ、出欠データ、そして授業準備、テストの評価、個別指導といった日常における学習指導のバックグラウンドである学習指導情報や、児童生徒の家庭状況を含む生徒指導に関するデータである。これらのデータに比べると、たとえば会議室の空室状況などのデータは、必要であってもそれほど重要ではない。

学習および生徒指導情報を一元的に管理することによって、個々の児童生徒に、より的確な指導を行うことは、エビデンスに基づいた的確な学習指導である。その経緯や結果は、保護者等に克明に説明できることになる。

教員の事務負担を軽減することを通して、児童生徒と向き合う時間を確保することは、教員の本来の専門性が発揮されるような時間の割合を、限られた勤務時間の中で多く保障するということである。税金で給料をもらい、かつ時給の高い教員が、雑務に追われて自分

●校務支援システムの例

『管理職・ミドルリーダーのための「校務の情報化」入門』p.47より



校務支援システムに情報や成績を一度入力しておくで、同じ情報や成績を使いたい場合に、それらを流用することができる。通知表、指導要録、抄本、調査書へそれぞれ転記する必要がなくなる。

の子どもに時間を使ってもらえない姿を見ることが、保護者にとってどんな気持ちか考えれば、このことの重要性が理解できる。校内での情報の共有化が促進されれば、教育活動に関する経営判断は迅速に、しかも数値を踏まえて行うことができるようになる。情報公開が求められる今日にとって、これは大切なことである。

「校務支援システム」の必要性

今日、ほぼすべての教員に対して、一人一台の校務用コンピュータが割り当てられている。しかし、それだけでは校務の情報化は十分には機能しない。コンピュータに堪能な教員たちによって、Excelなどで集計表を自作して校内で利用している場合があるが、当該の教員の異動後のメンテナンスや、情報

漏洩の危険性を考えた時、これは適切ではない。実際、教員の自作による通知表作成システムを用いていたがために、別の児童生徒のデータが記入された通知表が誤って配布されるなど、信用失墜行為と考えられるような事故も各地で報道されている。

以上のことからわかるように、校務の情報化が学校経営の改善に寄与するためには、「校務支援システム」の導入が不可欠である。校務支援システムは、各教員がログインすると、関連する情報の入力や参照ができたり、日頃の成績処理や出欠処理の結果が通知表に自動反映されたり、出席簿が自動印刷できたりするなど、児童生徒の個人情報扱わずには学習指導・生徒指導を行うことができないという学校組織の特徴を反映し、組織の情報化を支える基盤となるシステムである。

出欠席やその理由等に関する情報、学習指導に関する情報は、出席簿や指導要録等の公簿、あるいは通知表にデータ転送できるため、転記・点検などの時間やミスを著しく減少させることになり、学期末であっても教員に余裕ができることがメリットである。

校務が情報化したとしても、実際に成績をつけ

るのも、通知表の所見を書くのも教員であることに変わりはない。児童生徒に関する情報を必要に応じて提供し、教員の判断を助けるのが校務支援システムの役割である。これらによって、学習指導の精度が上がり、エビデンスに基づいた評価が行われ、説明責任を果たしやすくなる。つまり、校務の情報化は、学習指導や生徒指導の改善、翻って学校経営の改善に他ならない。

しかしながら、学校用のシステムを決裁する立場にある財務課などの教育委員会担当者には、校務の情報化の必要性は理解しにくい。財務課などの予算担当者の多くは、学校現場で働いたことがないために、教員の仕事の特殊性を支援する校務支援システムの導入の必要性を感じにくいのである。場合によっては、教育委員会の指導主事も、一度も校務の情報化を体験したことがない場合があり、その有用性をアピールできず、財務課を説得することが難しいことがある。

校務の情報化の必要性は、中央教育審議会答申をはじめ、いくつかの政策文書で示されている。これからいよいよ本格化する校務の情報化に対して、管理職やミドルリーダーが、学校経営に生かすために正確な認識を持っていることが必要である。

●参考文献

堀田龍也監修、校務情報化支援検討会編著（2012）『管理職・ミドルリーダーのための「校務の情報化」入門』教育開発研究所

持続可能性の高いICT活用から 取り組む



富山大学教育学部
准教授 高橋 純

世界の学校における ICT活用の動向

この1年余りで、米国、英国、フィンランド、ドイツ、韓国の授業におけるICT活用を調査する機会を得た。各国とも、温度差はあるものの、「先進的な学校」では、児童生徒一人1台端末をいかに活用するかが、最も大きな話題となっていた。これは、日本でも似た状況といえるだろう。そして、数年後には、多くの学校で、一人1台端末を活用することになるであろうことは疑いようがないほど、取り組みが進んでいた（写真1）。

特に、ノートパソコン（PC）の時代から行われている、ワープロやプレゼンテーションソフトによる表現活動、インターネットなどの情報の検索といった学習活動は、タブレットPCなど、機器が新しくなった現在でも、効果的に行われていた。一方、タブレットPCのアプリケーション（アプリ）の活用

を中心とした授業、タブレットPCを用いて自宅で予習をしてから授業に挑む反転授業、学習者用デジタル教科書といった新しい取り組みは、普及や定着に向けた試行錯誤が続いていた。文章を書く量が減った等の、新たな弊害の解消に取り組んでいるケースもあった。つまり、タブレットPCによる新しい取り組みは、持続可能な活用法を模索している研究段階にあると感じられた。



写真1 フィンランドの高校における普通教室

しかし、日本との大きな違いは、先進的な学校以外でも、教員が活用するためのICT機器が教室に常設されていることである。

学校以外でも、プロジェクトや実物投影機といった、教員が活用するためのICT機器が教室に常設されていることである。

。これらの国々で見た授業では、教員がプロジェクト等を活用し、教材や教具等を拡大提示することが当たり前であった。

まずは持続可能性の高い ICT活用から

持続可能性の高いICT活用とは、「効果的」「簡単」の重なりにある。効果的などだけでは持続しない。また、簡単とは、操作が簡単といったことだけではない。機器が教室に常設されているとか、教材作成や準備の手間が少ないとか、授業に簡単に組み込めるとか、そういったことも含めた簡単さである。

諸外国の事例から、現時点で持続可能と思われるICT活用を検討するならば、拡大提示を中心とした教員によるICT活用と、ワープロやプレゼンテーションソフトの活用といった、児童生徒によるICT活用が考えられる。実は、これらのICT活用は、我が国の学習指導要領解説にも数多く記述されている内容と、ほとんど同様である。このうち、特に記述が多いのは教員によるICT活用である（高橋ら、2010）。したがって、タブレットPCの活用による新しい学習指導法を研究開発していく必要性はあるものの、まずは、こういった学習指導要領にも示されるICT活用を、確実に全ての学校で実施していく必要がある。

また、全国学力・学習状況調査を活用した



図 教員による ICT 活用に必要な機器やコンテンツ

分析では、ICTの活用頻度が「ほぼ毎日」と高いほうが、平均正答率が高いことが明らかとなっている。さらに、1学級1セットの整備がされ、機器が「常設」されていると、「ほぼ毎日」の活用が行われやすいことも明らかとなっている（文部科学省、2010）。

ところが、我が国においては、諸外国では当たり前の教員によるICT活用に必要な機器すらも、常設されていない実態がある。2013年3月末の時点で、小学校の普通教室には、デジタルテレビが56.7%、プロジェクターが9.2%、電子黒板が7.3%しか常設されていない（文部科学省、2013）。中学校や高校では、さらに低い。まずは、教

員によるICT活用の日常化から取り組む必要がある。

教員による ICT 活用のポイント

教員によるICT活用の大部分は、教科書や教材等の「拡大提示」である。これは「映す内容」と「大きく映す機器」の組み合わせで行われる（図参照）。この際、より重要なのは画面に映す内容である。我々の調査では、最も多く映されるのは教科書であり、指導者用デジタル教科書や実物投影機で拡大提示される使い方の多いことが、明らかとなっている（高橋ら、2009）。



写真2 実物投影機を用いた教科書に線を引く指導

とで、より興味関心を高める発問になったり、言葉だけでは困難なことをわかりやすく説明したり、明確な指示をしたりすることができ

る。特に、学びが困難な児童生徒には、映像を用いて伝えた方がわかりやすい。写真2は、教科書の大事な箇所にある線を引く指導場面である。実物

投影機で拡大提示することで、二つのことを教えている。「線を引く位置」と「線の引き方」である。定規の向きや手の位置といったことも、教員がお手本となり教えている。他にも、答え合わせのシーンを拡大提示すれば、正解のみならず、答えの合わせ方も伝えることができる。教員が教えたいのは、正解そのものだけでなく、導き方や学習スキルも含めてである。学力の底上げを図りたい教員にとって、とても役立つ活用といえる。

おわりに

筆者の最近の研究の大部分は、一人1台端末に関するものである。しかし、こういった先進的な研究活動と、全ての学校への普及や教員研修は、また別のレベルにあると思っている。「効果的」と「簡単」の重なりにある持続可能性の高いICT活用を、段階的に発展させていく必要がある。

●参考文献
 文部科学省（2010）学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究
 文部科学省（2013）平成24年度 学校における教育の情報化の実態等に関する調査結果
 高橋純・堀田龍也（2009）すべての子どもがわかる授業づくり、高陵社書店
 高橋純、堀田龍也、南部昌敏（2010）新学習指導要領において必要とされる教員のICT活用指導力の検討、上越教育大学研究紀要、vol. 29、pp 131・139



小学校でのことば科授業の風景

も、その本当のよさがわからなくなっていませんか。」というお話をいただいた。

「そのような言葉の多様性を教材にしてみよう」という発想で作ったのが、「身

体の名前と慣用句」である。他にも、「伊丹の子どもたちに今つけたい言葉の力」という視点で、「伊丹の民話をもとに即興で劇を演じる教材」「マッピングを使って言葉の世界を広げる俳句教材」等、次々とオリジナル教材が生まれた。

今年度は、小学校の学習指導要領が改訂されたことを受け、「ことば科カリキュラム等検討委員会」を設置した。「新聞の活用」「資料の活用と読み取り」「要点を聞き分けメモをとる聞き方」等、時代のニーズに合った新しい教材作りにも取り組んでいる。

ことば科は、教科であるため、評価も行う。「子どものことばの土壌を耕し、五感を駆使して豊かな感性を育てる」という目標を達成するために、評価は、文書での表記としている。市教委では、「ことば科指導員研修会（年5回）」「ことば科担当者研修会（年3回）」及び、学校でのことば科公開授業等を行う「ことば科実践講座（年3回）」を実施し、教職員の指導力の向上を図っている。

子どもたちは、言葉に関する各種大会やコンクール等に、積極的に参加・応募するようになり、表彰される子も増えてきた。さらに、平成25年度の全国学力調査で、無解答率は、国語、算数、数学の全ての記述式問題において、全国平均を下回った。「ことば科」の取り組み以前に比べ、「書く力」が、着実についてきていると評価できる。

市民ぐるみで「ことばと読書を大切にする教育」を

2012年7月には、新図書館「ことば蔵」が竣工した。伊丹市民でもある、作家の田辺聖子さんが名誉館長である。ここは、明治時代に開設された、図書館施設を有した私塾「三余学寮^{さんよがくりょう}」のあった地である。100年の時を経て、「本と出会い、言葉を交わす『公園のような図書館』」が、「ことば文化都市伊丹」の拠点としてオープンしたのである。若い職員がアイデアを生かし、さまざまな事業を行っている。なかでも、自分が薦めたい本の推薦コメントを、

その本の帯に書いて棚に並べ、気になる本を交換し合う「カエボン」コーナーは、本好きの交流スペースとなっている。新聞などのメディアでも紹介されている他、フェイスブック等での積極的な情報発信・収集も行っている。

学校と図書館の連携として新たに始まった取り組みが、「帯ワングランプリ」である。本の帯を中学生が作成し、市民が投票する。グランプリに輝いた生徒の作品は、実際に書店に並ぶ。また、11月の「ことば蔵まつり」では、市内の全中学校から代表が集まって、「ビブリオバトル（テーマに応じたお気に入りの本を持ち合い、一人5分の持ち時間で書評した後、観客が一番読みたくなった本を決定する）」を開催。今年度は、「未来」をテーマに、熱い書評合戦を繰り広げた。

学校と図書館をつなぐ役割を担うのは、専任の司書として小中学校に配置されている読書指導員である。読書指導員は、学校図書館の活性化



ことば蔵での、中学生ビブリオバトル大会

化に加え、学校支援地域本部の図書館ボランティアのコーディネーター役も果たし、「ことば蔵」と積極的な交流を行っている。その成果は、小学校での一月の平均読書数が、全国平均を上回るという結果に表れた。中学校では、全校で「朝の読書」を実施している。2012年度、『高橋松之助記念 朝の読書大賞』において、伊丹市立東中学校が、全国大賞を受賞した。地域や保護者と連携した読書活動が認められたのである。

さらに、日本漢字能力検定、日本語検定などの会場を誘致して、児童生徒や保護者、市民が受検しやすくしたり、市の演劇ホール「アイホール」から、プロの演劇人が講師として派遣される演劇体験授業を行ったりするなど、言葉や表現に対する理解を深める環境の提供に努めている。

伊丹の未来を託す子どもたちの言葉の力を育てる「まちおこし」、まさに「言葉おこし」が、市民総がかりで行われている。まちぐるみの「ことばと読書を大切にする教育」のため、多くの市民、識者とともに、さらに「ことば」を育む環境をつくっていききたい。🌻

「ことば文化都市」伊丹の「言葉おこし」 ～「読む・書く・話す・聞く」を基本とした「ことば科」の授業～

兵庫県の南東部に位置する伊丹市は、江戸時代には酒造業が発展し、「清酒発祥の地」としても知られる。また、文学活動も活発で、西山宗因、井原西鶴ら諸国の文人墨客が集い、俳諧文化が栄えたまちであった。「東の芭蕉、西の鬼貫」と言われた俳人、上島鬼貫生誕の地でもあり、現在でも、その精神を受け継ぐべく、日本三大俳諧コレクションの一つである『柿衛文庫』を有し、市をあげて“ことば文化”の推進に取り組んでいる。

伊丹市では、その特性を活かしつつ、子どもたちの「言葉の力」を育てる取り組みを行っている。平成18年度から、国の構造改革特別区域「『読む・書く・話す・聞く』ことば文化都市伊丹特区」に指定された。それを受けてスタートしたのが、伊丹市独自の教科「ことば科」である。本市の取り組みを通して、子どもたちに「言葉の力」をつける方策について考えていきたい。

兵庫県 伊丹市教育委員会



言葉の限界が世界の限界

伊丹の応援団、「伊丹大使」の一人であり、「ことば科」の名づけ親でもある、俳人の坪内稔典先生の言葉がある。「ドイツの哲学者ウイトゲンシュタインは〈私の言葉の限界が私の世界の限界である〉という言葉を残している。私たちは身につけている言葉に即して周りの世界を見ており、自分の言葉以上には何も見えない。新しい世界を見るためには新しい言葉を獲得しないとイケない。新しい言葉が新しい世界を開くのです。」

平成17年度の伊丹市の学習到達度調査では、国語科において、特に「書く力」の不足が見られた。また、国語だけでなく、全ての記述式問題で、白紙が多かった。

また、言葉を用いたコミュニケーション能力の低下が、さまざまな問題を招いているのではないかとの指摘もある。そして、昔ながらの言葉・文化が受け継がれていないという現実もある。数年前、市内の中学校で、先生方が「門松」を作った際には、生徒たちは、実物を見たことはあるものの、「門松」という言葉が出てこなかったということがあった。



日本三大俳諧コレクションの一つ、柿衛文庫

豊かな言葉をもつことで、広い世界を見たり感じたりすることのできる子どもを育てたい。このような背景のもと、市をあげて「ことば」を大切にする取り組みを進めることとなった。

「ことば科」の授業とは

「ことば科」は、文部科学省の「教育課程特例校」の指定を受け、教科として、小学校3年生から6年生で、週に1時間の授業を実施しているものである。当初は、専任の「ことば科指導員」を市費で配置し、担任とのチームティーチングという形で授業を進めてきた。平成22年度からは、3・4年生の授業は担任が行い、5・6年生は、ことば科講師と担任のチームティーチングで授業を実施している。

「ことば科」のカリキュラム及び教材は、ことば科講師が市教委の担当者とともに作成し、伊丹市立総合教育センターのデータウェブにアップしている。各小学校では、それをもとにカリキュラムを決めて、自校の実態に合った教材を編集し、学習を進めている。

教材作成にあたっては、柿衛文庫の館長にも協力を仰いだ。館長からは、「足にも、ひざ・かかと・ふくらはぎと、場所によっていろいろな名前がついています。でも、子どもたちは、全て『足』で済ませてしまうことが多いですね。日本の文学を読んで



▲スクール・コミュニティ事業開始と同時に、あいさつ運動に力を入れている保原小学校。子どもたちも、先生や保護者以外の大人と接することに慣れ、学校内だけでなく、町でも、きちんと地域の人やお客さんにあいさつをするようになってきた。小学生の子どもや孫のいない家庭でも、子どもたちに目が向くようになり、あいさつを通して、町全体が明るくなったそう。

福島県伊達市保原小学校

学校が地域をつなぐ スクール・コミュニティ

伊達市の中心部に位置する保原小学校（佐藤義仁校長、730名）。東に阿武隈山系の霊山、西に吾妻連峰を遠望する、風光明媚な地です。2012年、老朽化した校舎の建て替えを機に、地域の人々の集う場ともなる「スクール・コミュニティ」が誕生。市民と子どもがともに学び、触れ合う学校として生まれ変わった保原小学校では、明るいあいさつの声があちこちに響いています。

「子縁」で「コミュニティづくり

「スクール・コミュニティ（SC）」は、地域の、学校への支援を促すだけでなく、学校が市民の交流拠点になるという新しい意味合いをもつ、保原小学校独自の言葉です。子どもへの教育を縁とした関わり合い、すなわち「子縁」が、地域住民の支え合いや学びを生み、地域づくりにつながる、という考え方に基づきます。

保原小学校は大規模校。旧校舎時代には、地域のかたが気軽に学校に出入りしたり、子どもたちに積極的に関わったりする機会や雰囲気は、あまりありませんでした。また、個々の地域団体の活動は活発でも、団体どうしの連携や交流は少なかったと

います。SCは、学校支援を縁に、さまざまな団体がそれぞれの個性を生かして連携する場、地域住民の、応援したいという思いを実現できる場となっているのです。

学校と地域、プラスのスパイラル

地域コーディネーターの浅野テル子さんは、2年目となった活動を振り返り、「子どもたちのためにどんなことができるのか、一緒に考えていくことで、子どもとともに、私たち地域住民も成長しています。」と、学校と地域が「プラスのスパイラル」を築いていることを成果として挙げます。ただきれいにするだけだったトイレ清掃ボランティアも、子どものために清掃マニュアルのビデオを



◀▲1年生の「生活科」では、虫の生態や種類に詳しい、「虫おぼさん」こと菅野真由美さんがゲストティーチャーとして活躍。普段は「質問ボックス」に寄せられた質問を受け、お昼の放送で回答。この日は、多くの種類の虫の赤ちゃんを連れてきて、子どもたちに命もつながりの大切さを話してくれた。手作りの教材と、熱心な語り口に、子どもたちは夢中。

▼スクール・コミュニティは、保原小マスコットキャラクター「ほぼラッキー」の作成にも関わった。「あいさつ名人」に任命された子どもは、ほぼラッキーをあしらった特製のバッジをつけることができる。



▶▲放課後の「チャレンジ教室」は、材料費以外は無料。この日は、ボランティアとして、プロのジャズサキソフオンプレーヤーの佐藤さん、茶道の先生の武藤さんが指導に訪れた。SCでは、他にも、伊達市特産の「天蚕」の飼育や、ピオトープづくり、花を届けてくれる「お花おぼさん」など、多彩な活動で子どもたちを応援。平成25年度は、半年間で延べ1,100名以上のボランティアが参加。講堂やアリーナ等の地域による施設利用者は、22,600名以上を数え、学校が地域の中心としての役割を果たしている。

つくり、子どもが普段の掃除をどうすればよいか、学校の清掃指導にどう役立てられるかまで考えるようになりました。「してあげたから満足」に終わらず、何が本当に子どものためになるのかを熟慮して、企画・行動するようになったといいます。

校長先生は、「子どもたちも、先生たちも、支援を受けることの意味について、意識改革ができてきました。学校が気づかなかったような支援をいただき、本当にありがたい。」と、感謝の笑みを浮かべました。

■ スクール・コミュニティは「居場所」

子どもたちは、昼休みや放課後に校内に設けられた「コミュニティルーム」をのぞき、大人と話したり遊んだりしていきます。地域の大人は、お茶を飲み、気軽に立ち寄ります。「ここに来れば、子どもにとっても、大人にとっても『居場所』があるんです」と、浅野さん。校長先生は、「昔は当たり前だった地域のつながりが、新しい形で復活した感じですよ。」と、感慨を深めます。

学校と地域住民が、ともに高め合っている保原小学校SC。双方にとっての価値ある「居場所」として、その存在感は、ますます増していきそうです。

新潟

郷土を愛し、夢と誇りをもつ教育の充実

～30年の歴史に裏づけられた「夕づる集会」の取り組み～

佐渡市立加茂小学校教頭
後田 継雄

「じやんに着せるふと布 ばやんに着せるふと布 ちんからかんトントントン ちんからかんからトントントン」

闇に包まれた体育館の中、スポットライトに照らされた児童の独唱で、「夕づる集会」は幕を開けます。

この活動が始まったのは、昭和59年。本校が県小研指定の音楽研究発表会を行ったことに遡ります。

「夕づる集会」は、全校児童が演じるオペレッタ（歌とせりふのある歌劇）で、話の原作は、全国のさまざまな地域で民話として伝わる「鶴女房」です。佐渡市の北片辺きたかたべという地域にも、この話が伝わっており、劇作家・木下順二氏の民話劇「夕鶴」は、佐渡の民話をもとにした作品です。これをベースに、團伊玖磨氏作曲のオペラ「夕鶴」や、矢田部誠子氏作詞・矢田部宏氏作曲の合唱曲「つる」などを取り入れ、作者の了解を得て、子ども向けに構成したものです。

加茂小学校にとって、この行事は、長年にわたり、特色ある教育活動として位置づいてきました。劇中の登場人物である「つう」と「与ひょう」は、6年生全員によるオーディションにより選出されます。また、各学年が、それぞれ大切な役を受け持ちます。「村の子ども」役を演じるのは、1年生です。そして、職員の指導の下、最終的には、児童が合奏、合唱、照明、大道具など全てを受け持ち、児童だけで作り上げる活動になっています。特に今年度は、30回目を迎える記念すべき年ということもあり、「全校のみんなで夕づる集会を成功させよう」という思いが強く、練習にも熱が入りました。

今年度、「夕づる集会30周年記念誌」を作成しました。歴代の「つう」「与ひょう」経験者にも寄稿を依頼しました。佐渡を離れて暮らす、「つう」を演じた卒業生の一文です。

「この伝統ある夕づる集会で、つう役を演じることができ、とても誇りに思います。これから、さらにキラキラした、素敵な夕づる集会になることを期待しています。」



た、素敵な夕づる集会になることを期待しています。」

北海道

自ら考え 見方を広げ 学び合う子どもの育成

平取町立二風谷小学校校長
千葉 竜美

— 風谷小学校は、日高地区西部に位置する、全校生徒27人、複式学級の学校です。平成23年度より、『自ら考え、見かたを広げ、学びあう子どもの育成』をテーマとして、研究に取り組んでいます。国語科説明文の読み方を窓口として、「1. 児童が説明文を読み取る際の言語を具体的にイメージできる方法や読み取った際の足跡作り 2. お互いの考えをまとめる場の設定と方法 3. 伝える力を身につけさせる言語活動の場の設定」を大切に研究を進めてきました。目的意識や伝える対象を明確にして、言語活動の場の設定をし、表現力を高めることに力を入れています。

平成25年9月、全道へき地複式教育研究大会日高大会にて、国語の授業を公開しました。公開授業の一つ、全校読書集会「広げよう 本の世界」では、各学年が、これまで国語科で学習したことをもとに、本の紹介に取り組みました。

5・6年生は、井上ひさしの戯曲『國語元年』を紹介しました。テレビドラマ用に書かれた、喜劇らしい、言葉の楽しさにあふれた作品です。子どもたちは、自分たちが使い慣れた言葉が「北海道弁」という意識はもっていませんでした。しかし、戯曲を音読し、演じるうちに、共通語と方言の差異、各地の方言の違いなどを発見し、おもしろさを感じ取るようになりました。自分たちが、言葉のおもしろさをどう感じているのか、それをどう観客に伝えるか、表現の仕方でもどう伝わり方が違うのかを検討しながら、読み方を工夫し、発音に注意しながら、練習を重ねました。

私たちは、学習の素材や事物・現象を、子どもの目線に寄り添って一緒に見、子どもの発見に共感・感動し、ともに楽しむことが大切だと考えています。子どもの無限大の好奇心、探究心から、発見や考えを引き出し、構成して価値づけるのが指導者の仕事だと思います。毎日の、子どもたちの素敵な大発見を大切に授業研究を進め、二風谷



の地に生きる子どもたちの教育の充実に向け、努力していきたいと考えています。

熊本

東京

命かがやかせ、 ともに伸びる五福の子

～五福っ子を健やかな「心」と「体」に～

熊本市立五福小学校校長

中村 和徳

五福小学校は、今年度、創立138年を迎えました。校名は、『書経』の『洪範』に由来しており、学校教育目標は、「五福精神（「寿」「富」「康寧」「攸好徳」「考終命」）を基底におき、徳・知・体の調和のとれた心豊かな児童を育成する」です。なかでも、「攸好徳（いつも道徳を守り、正しいおこないをすること）」「康寧（からだが強くと、健康であること）」に表される「心」と「体」の健康は、本校教育の基盤として、今も続く五福小学校の伝統です。そのなかでも力を入れている、「心」を育む取り組みを紹介します。

1. 「心スキルタイム」

隔週30分、木曜日に実施。楽しいゲームに取り組むことで、子どもどうしのかかわり合いを深め、豊かな心を育成する活動です。新聞紙1枚にグループ全員が協力して乗る「ノアの方舟」、互いを知り合うための「インタビューゲーム」、部分に分けて描き上げる「みんなで絵を描こう」などを行います。相手の考えや思いに共感し、相手を尊重するとともに、自らのよさを大切にすることを育てていきます。

2. 「心カレンダー」

毎月1週間実施。子ども自身が、その日の朝の気持ちと帰りの気持ちを「幸せ・いい気分」「どうしよう」などの16のパターンから選び、なぜそういう気持ちなのかを考えます。自分を見つめ直し、自分の気持ちの変化や理由に気づくことで、感情をコントロールできる力を育成しようとする活動です。

健やかな心の育成は、一朝一夕にできるものではありません。常に子どもたちの「心」に目を向け、全職員が子どもの変容や課題を共有できるよう、「心部会」を設けて、日常生活及び授業のなかで、かかわり合いを重んじた豊かな心の育成を進めています。これからも、「全ては子どもたちのために」を教職員、保護者、地域社会の合い言葉として、みんなで子どもたちを見守り、育てていきます。



途切れのない 発達支援を目ざして

～立川市子ども未来センターを核として～

立川市教育委員会

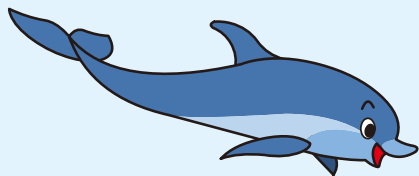
立川市では、平成24年4月、新たに「特別支援教育課」を新設しました。就学前から早期対応を図り、就学後も継続した相談・支援ができるように組織を整備しました。職員体制についても、課長の他、保護者、学校との調整のため、特別支援教育専門の統括指導主事を配置しました。同年12月には、旧市役所跡地にオープンした「立川市子ども未来センター」の1階に、子ども家庭部子ども家庭支援センターとともに移転し、総合的な子育て支援の拠点として、同じ施設の中で、文字どおり「途切れのない支援」に取り組んでいます。

同センターは、子育て・教育・文化芸術活動・市民活動のサポートと、にぎわいづくりの拠点として、多くの機能を備えた複合型施設です。多様な機能をもつことで、地域のさまざまな世代のかたたちが集い、笑顔が広がる、立川市の未来につながる施設を目ざしています。

1階の子育て支援フロアでは、乳幼児と保護者が気軽に集まり交流する「子育てひろば」や、一時預かり事業等を展開しています。また、「子ども総合相談受付」を設置。「どこに相談すればよいかわからない」という子どもや保護者の話を聞き、課題を整理して、関係機関と連携した支援につなげます。さらに、専門的な相談機能として、発達相談、教育相談、就学相談を置いています。このような体制を整えた後は、いずれの相談件数も増加しており、よりきめ細かいサポートを行えるようになりました。

現在、特に、発達支援が必要な子どもへの早期支援・早期連携について、具体的な連携の取り組みを進めています。相談連絡会議の定期開催、年長の発達支援親子グループへの就学相談員の参加、発達相談から教育相談、就学相談へのつなぎ、研修の合同参加等です。今後は、子ども未来センターにおける成果を学校へつなげていくとともに、就学後の学校へのフォローを充実させていくべく、検討を進めているところです。





入賞作品発表

地球と
なかよし
大賞

何かへん

松口 歩佳 大阪府 こどもエコクラブ「ぼぼっぼくらぶ」小学3年

木のメを見つけた。何かへん。フタバの下
のクキにカレハがささっている。もしかして、
タネの上にあったカレハをつきやぶったのか
な。でも、それだとカレハがもち上げられて
しまうかも。もしかして、虫がかじったあと
のあなにうまくいったのかな。でも、それだ
とクキよりフタバのほうが大きいから、うま
く入らないかも。もしかして、カレハの上
にタネがおちて、ネッコがあなから入ったの
かな。でも、それだとネッコが、どこに行く
かわからないかも。もしかして、カレハのあ
なにタネがはさまったのかな。それだとうま
いきそう。



評 自然へのおどろき、とまどい、なぜなぜと自問自答を重ねる、あなたの姿。科学の心が、生き生きと描かれています。

全国小中学校
環境教育
研究会賞

一步前の世界へ

宮本 満理晏

広島県 尾道市立高見小学校6年

この絵は、赤ちゃんが、クローバーの畑をはいはいするところをかきました。

一步一步前へ進もうとする、その一生けん命な姿に心をうたれこの絵をかきました。

今、日本、世界は、人をきずつけること、きずつけられることがあたり前ようになり、とても心が貧しくなっているといます。戦争が起き、いじめが起きています。

そんな世界の中、赤ちゃんはなにがあるか、なにがおこるかわからない一步前の世界へと歩もうとしています。だから私たちも一步をふみ出し、安心できる平和な世の中を作っていくべきだと、私は思います。

評 四つ葉のクローバーの原を、前へ前へとはいはいする赤ちゃんの、無心な表情。それを支えるのが、わたしたちの務めです。



地球となかよしメッセージ

2003年より始まった「地球となかよしメッセージ」。年々、テーマの幅が広がっています。今回も、緻密な観察眼、やさしいまなざし、未来への希望に満ちた視線を感じる、すばらしい作品が、たくさん寄せられました。

◎協賛／日本環境教育学会 ◎後援／環境省、日本環境協会、全国小中学校環境教育研究会、毎日新聞社、毎日小学生新聞

環境大臣賞

たんぽぽって、すごい！

小林 菜央華 兵庫県 姫路市立城陽小学校1年

おにわに、もうすぐ「わたげ」になりそうな「たんぽぽ」がありました。それを、ママがぬいてしまいました。「かわいそう」とおもって、もうすぐ、わたげになりそうな「たんぽぽ」を、そおっとそのまま、げんかんにおいておきました。するとびっくり!! 水をつけていなかったのに、2日ごとに白い大きな「わたげ」になっていました。「たんぽぽ」のつよさにおどろきました。かってきた、花びんのお花は、水につかっていたら、すぐにかれてしまうのに。

しぜんって、すごいなあとおもいました。わたしも、たんぽぽのように、こまったことがあってもじぶんでなんとかできるつよさをもちたいです。



評 何よりも、おどろきの目、口、指の動きが生きています。自然の強さに心を通わせたあなたが、すばらしい。

日本環境教育学会賞

一雫の生命

松口 果歩・松口 莉歩

大阪府 こどもエコクラブ「ぼぼっぼくらぶ」中学3年

川の水を一雫 プレパラートに載せて
顕微鏡で覗いてみると

いるよ いるよ うじゃうじゃいるよ
植物プランクトン

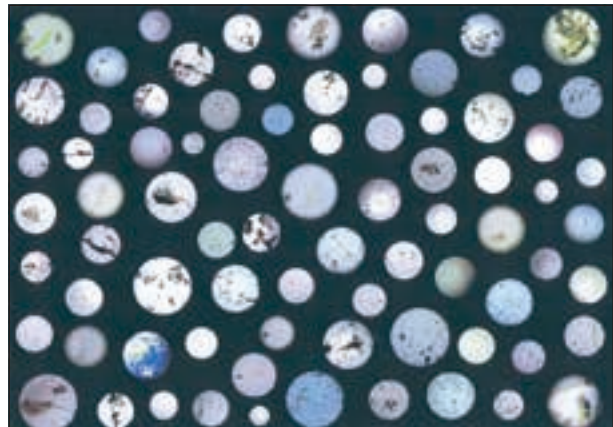
動く 動く 動き回るよ
動物プランクトン

うわっ! キレイ 緑色に輝く葉緑体
生命の源 光合成

あっ! 食べた 繰り広げられる
生命のつながり 食物連鎖

川の水の一雫 顕微鏡写真を集めてみると
夜空に瞬く星のよう

河の星の一雫 水の惑星 地球
覗いてみると



評 水の惑星、地球。その銀河を支える、微小の生物。地球の誕生にも誘われていく軌跡が、みごとに表現されています。

毎日
新聞社賞

ぼくらは、守られている

比留間 健太

東京都 世田谷区立祖師谷小学校 3年



この写真なんだかわかりますか。これは、ぼくの小学校の前の道だ。この道には、青とオレンジと白色の三角のつながった形の変ったもようがかかっている。

これは、ソリッドシートという名前のもようで、車を運転する人には、道がでこぼこしているように見えて、注意し、ゆっくりと走ってもらうためのものだそうだ。

ただの落書きではなく、ぼくたちみんなを守るためにえがかれていることがわかった。ぼくらが毎日安全に登校できるのは、このような変った形のもようのおかげなんだなあと思った。

運転手さん、このもようを見たら、ゆっくりやさしく走ってくださいね。

評 生活が便利になるほど、安全・安心を守り、危険を乗り越える「知恵」や「わざ」が、わたしたちに求められます。



コオロギと歌ったよ

中岡 柚羽

愛媛県 松山市立堀江小学校 2年

毎日小学生
新聞賞

わたしはコオロギ二ひきと歌っています。わたしは、歌が大すきだからです。コオロギは、歌を「リンリン」ときれいな声で歌います。わたしも、リンリンとあわせます。わたしはちがうぎょくをコオロギに教えます。コオロギは、すぐにその歌をおぼえてくれました。すごかったのしかったです。

わたしは、そんなことがほんとなったらいいなと思いました。

評 きっとコオロギも、あなたといっしょに歌いたいと、鳴きつつけているのでしょうか。歌は、自然をつなぐ、友達です。

学校賞 東京都 日野市立日野第八小学校



地球にしよう！

佐々木 明香 4年

もし、自分が誰かの便利さのために、何でもちょうだい、ちょうだいとうばわれて、何にも聞いてもらえず傷つくばかりだったら…。たえられない！

怒ってあばれても、こわれたところは元どおりにはならないかもしれない。人間が地球にしてきたことってそういう事。子どもなりにリサイクルや節電、節水を心がけてはいるけど、他にもやれる事。それは地球の成り立ちや自然のしくみに関心を

もって、たくさんの質問を地球にしてみる事ではないだろうか。

身近な生き物・土・水・空・日々の天気などなど。地球を知ろうとすることが、地球と仲良くなれる第一歩だと思う。



地球はみんなのふるさと

牧野 琢任 4年

夏休みに、高知県四万十市で、気温が四十一度にもなる暑さで日本中はびっくりしました。そして、熱中しょうや大雨のえいきょうで、たおれ死んでしまいました。悲しいと思いました。なんで大雨がふったり、暑すぎるくらい気温が高くなるのかなと不思議に思いました。

また、エジプトという国ではエジプト人どうしが戦争して何百人も死んだというニュースを見ました。とても残こくで、

ぼくは、その理由がわかりません。えい画の、「少年H」を見て、昔、日本も戦争をしてたんだなあと思いました。ぜったい戦争が起きないでほしいです。

ぼくは、自然さい害や戦争が起きなくて、植物や動物や昆虫や人間たちが、元気に生きていけるような世界になってほしいです。

◎審査委員(敬称略)

児島 邦宏 (東京学芸大学名誉教授)

尾形 鉄二 (環境省総合環境政策局 環境教育推進室室長補佐)

角屋 重樹 (日本体育大学教授)

小玉 敏也 (日本環境教育学会常任理事・広報委員長/麻布大学教授)

河野えつ子 (全国小中学校環境教育研究会事務局長/東京都板橋区立西向原小学校校長)

小島明日菜 (毎日新聞社「教育と新聞」推進本部長)

小林 一光 (教育出版株式会社代表取締役社長)



入選作品



山のなかま

小森 悠生
高知県 いの町立神谷小学校1年

ぼくのいえは山の上にあります。いのしし、きつね、うさぎ、むささび、きつつき、いろんなどうぶつがこの山にすんでいます。どうぶつが、たんぼやはたけをあらしてこまることもあるけど、ぼくは、山のどうぶつが大好きです。

でも、のうやくで、とりがしんでいたり、だいおきしんというどくがでるのに、はたけでごみをもやす人もいてくさいので、しぜんがよごれてかなしいです。山がよごれると、川をとってうみもよごれます。

ぼくは、しぜんをよごさないようにきをつけてくらしたいです。



草葉に混じれば 火もまた涼し

後藤 聡
神奈川県 相模原市立鶴野森中学校3年

八月中旬、今年の夏はあまりの猛暑で、自分の苦手な虫も出てこない模様。それじゃあこの機会にカメラを首にかけ、花を撮るつもりで林の中へいざ出発。

「あちい…。」普段インドア派の自分は痛いくらいの日射とムシムシとした湿気があり、おそらく三十度超えた真夏の午後二時で、セミは元気一杯鳴いている森の中、花が全く見あたらない。

開始十五分くらいで熱中症対策帽子のみの自分はそろそろ限界。帰ろうと思って森を抜ける途中、枝につかまって動かない珍しい色のトンボ発見。近よってカメラで「カシャッ」と音がしても動かない。でも生きている。そうか。お前も夏バテか。仲間だ。



カブトムシになった

上野 颯馬
愛媛県 大洲市立河辺小学校2年

友だちのお父さんがカブトムシのよう虫をたくさんくれました。くらいロッカーの中に入れて、ときどき、そっとのぞいて見たけど、土の中にいて、どうなっているのかわ

かりません。でも7月になって、えさをおいてみると、たべたあとがありました。「きっとカブトムシになってるよ。」と言って、みんなでそっとそっと土をほっていくと、カブトムシがつぎつぎにでてきました。「ヤッター。」すごいです。とってもかっこいいです。がんばって生まれてきたから、大切にしたいと思います。

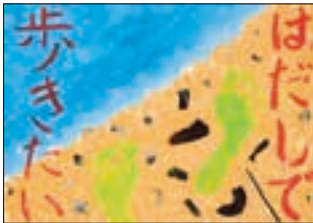


海は、生きている

矢野 里於
東京都 荒川区立瑞光小学校5年

海はどうしてきたないんだろう？ それはほとんどの人が海にゴミをすてるから きたなくなる。

おりがみ 1枚1枚があつまって きれいな海ができたように人の気持ちがあつまれば 必ずきれいな海になるし海だけじゃなく ちがう場所も 自分のゴミじゃなくても一人一人 心がけていこう



はだしで歩きたい

榎 詩乃
広島県 尾道市立高見小学校5年

海に、きけんゴミがたくさんあり、砂浜をはだしで歩くことができません。でも、ゴミを取っても取ってもなくなりません。

ゴミを何一つなくすには、だれかがゴミを拾えばいいのではなく、かんきょうのことを考えるようになれば、ゴミはなくなり、砂浜をはだしで歩けるようになります。

このようなことが、この絵から、世界中の人に伝わればいいなと思いがらかきました。

この絵を見てくれた人に、私の気持ちが伝わるといいです。



大すきなリリ

安田 彪摩
富山県 氷見市立朝日丘小学校4年

おじいちゃんとおばあちゃんの家、白しほのリリがいます。ぼくは、リリが大すきです。川や、海や、公園などいつでもどこでもいっしょに遊びにいきます。リリは水や、土や、草がたくさんある自ぜんがあるば所が大すきです。ぼくも、自ぜんがたくさんあるば所、リリといっしょに遊ぶことが、大すきです。これからも、きれいな水や、草や、土がたくさんある自ぜんの中でリリといっしょに遊びたいです。



天使と悪魔

大橋 勇太郎
香港日本人学校小学部大埔校6年

この作品のテーマは、「表情」です。天使はやさしく思いやりのある人を表し、悪魔は、冷たくておこっている人を表しています。

私の身の周りの人々には、天使のような人もいれば、悪魔のような人もいます。そのような人は、世界中にいます。私は人種差別をしないで、世界中の人が、一つになり平和になってほしいと願っています。

そんな人、どんな表情をもった人でも、一つになれば一生懸命になれると思います。かく兵器などをなくし、このような平和な世界をみんなで作っていきましょう。



世界遺産でも…

高須 健太
神奈川県 相模原市立鶴野森中学校1年

最近世界遺産になった富士山。今は、日本、外国から続々と登山客がおしよせている。だがその裏では、たくさんのゴミが捨てられている。その中でも保護団体の方がゴミをひろってくださっている。

また、5合目の入り口では、ゴミ袋を無料で配布し、持ち帰るようにも指示している。

ほかにもトイレを有料にしたり、マイカーのきせいもある。これだけ富士山を大切にしようとしているのに、ゴミを平気で、捨てている人の気持ちを知りたいし、なぜこれだけががんばっている人たちがいるのに、ゴミを捨てているのか分からないけど、富士山をキレイな環境にしてほしいです。



まもなく、東日本大震災から3年。
全国から寄せられた支援が、子どもたちの音楽活動の力になっています。

響け！復興のハーモニー 支援を明日への力にかえて踏み出す一歩

宮城県吹奏楽連盟 副理事長 東北高等学校教諭

遠藤 昇

2011年3月11日、大きな揺れとともに、東北の各学校の音楽室では、楽器が落下し、がれきの下敷きとなった。沿岸部では、大津波により、子どもたちの使っていた大切な楽器たちも、海に沈んだ。

宮城県吹奏楽連盟加盟の多くの学校が被災し、その後の活動のことも考えられない学校も多かった。そんな中、3月下旬、連盟に1通のメールが届いた。そこには、「震災で楽器を失った子どもたちに楽器を送らせてください。」と綴ってあった。これを受けて、連盟では、現状の把握と今後の被災団体への支援について話し合いが行われ、「宮城県楽器バンク」を立ち上げることが決定した。（後に、岩手県・福島県への支援を行うことも決まった。）

仙台市にある、東北高等学校音楽部がその任に当たることになった。東北高校では、揺れは大きかったものの、学校施設の被害や部員の被災状況が軽微であり、学校側の協力もあって、即時、準備を開始できた。手探りの取り組みだったが、ホームページなどで全国に被災状況を発信し、楽器や用品の支援を呼びかけたところ、反応は早く、海外からの問い合わせもあった。4月7日には最初の楽器が到着。その後、全国の音楽行事でも支援を呼びかけたところ、毎日、数十



台の楽器が届き、5月末には、400台を超える楽器と、数千点に及ぶ用品(リンドなどの消耗品や譜面台、楽譜等)が集まった。全日本吹奏楽連盟経由で、義援金も多く寄せられた。

東北高校の音楽部員の日課は、荷物の梱包を解き、自身のチェックと記録を行い、楽器の状況によって仕分けし、使える状態出荷することだった。大変な作業であったが、活動を継続できたのは、彼ら・彼女らの使命感と機動力のおかげである。修理作業や備品購入は、義援金

をもとに、地元の楽器店に依頼し、地元企業の復興にもつながった。調整等を行う専門技術スタッフを、ボランティアで派遣してくださった大手楽器会社もある。そうして、準備の整った楽器から、延べ67団体に、336台を寄贈することができた。

実は、被災の全容の把握には、学校も生徒も、顧問教諭も被災している状況

の中、2011年の秋までなかった。楽器そのものの不足もあるが、学校にも家庭にも活動予算がないため、活動の縮小や備品の購入・管理ができない状況があることもわかった。今後は、経済困難により音楽活動をあきらめざるをえない生徒への支援や、人材の派遣等の支援も、より充実させていく。

2012年8月には、被災地の中学生125名とともに、東京・サントリーホールにて復興コンサートを開催し、全国の皆さんへのお礼の気持ちを込めて演奏した。支援活動を通して、私たちは、普段満ちあふれている音や音楽が、人々の感情の表れであることを実感した。連盟も、子どもたちも、「音楽は国境を越えて、全ての人々に通ずる」を体験することができたと思っている。

支援してくださったたくさんのかたがたの、いろいろな心・思いが詰まった楽器や備品たち。それを受け継いだ子どもたちは、熱心に練習し、心に響く音色を響かせてくれることだろう。



疑似科学との

つきあいかた

第4回



長崎大学教育学部

准教授 長島 雅裕 教授 上園 恒太郎

「脳」は、現代科学のフロンティアの一つ。脳に関する知見は、めざましい進歩を遂げています。人間とはいったい何か、私たちは、どのように考え、感じるのか——誰しもが抱く疑問の解決する日がやってくるかもしれません。そう考えると、ワクワクしますね。

一方、「脳科学の応用」をうたう本やゲームも、大量に発行されています。脳をよくするのが教育だ、というわけで、教育への応用も盛んです。しかし、それらを眺めてみると、どうもおかしなものが多いようです。

ひところブームになったのが、「ゲーム脳」です。テレビゲームをし続けると脳がダメージを受け、認知症患者と同様の脳波を示す、というのです。ゲームに熱中する子どもたちを何とかしたい、という教師や親の願いにこたえたからでしょうか、きちんとした論文もなく、一般向けの新书で提唱されただけで急速に広まりました。「ゲーム脳」提唱者による、教育関係者向けの講演もありました。しかし、「ゲーム脳」は、

多くの専門家からさまざまな疑問が出されており、まともな学説として検討に値するものとはみなされていません。

現代の教育で重要視されている課題を「脳科学」として取り扱う例のなかには、「自閉症や発達障害は治る」など、科学的な根拠に基づかない主張もあります。政治の場でもこの風潮は現れ、「乳幼児期の愛着形成の不足が軽度発達障害の要因」「わが国の伝統的子育てによって発達障害は予防、防止できる」との内容を盛り込んだ条例案を検討しようとした例もありました。

「脳の活性化」もしばしば見られるキーワードですが、「活性化」の意味は、曖昧な場合が多いのです。パニック状態の脳は、実際に活性化しています。しかし、だから勉強がよくできるとは言えません。脳がどういう状態になるかという脳科学の問題と、人間の教育は、別に検証するべきです。「脳の活性化」は、いわゆる「頭がいい」ことではありません。「頭がいい」という内容には、学習や経験が入ります。この自分でのいいのだと受け入れること（自己肯定感）は、脳の活性化の問題ではありません。

「脳科学の応用」として取り上げられる多くは、科学的根拠が曖昧であり、単に「欲しい結論」を正当化するために、科学らしさを装う「脳科学」が持ち出されているようです。自分が正しいと思う方法を権威づけるといえるわけです。典型的な例としては「右脳の活用」や「10%しか活用されていない脳」などの俗説がありますが、これらは「神経神話」と呼ばれ、専門家から警鐘が鳴らされています。

そもそも、教育の方法や教育技術において「脳」を持ち出すことは、本当に必要でしょうか。その多くは、そうせずとも、教育学の方法にのっとって、きちんと効果を検証できるはずで。私たちは、「脳」を持ち出されると、つい本当かもしれないと思ってしまいます。以前取り上げた、血液型やEM菌などと同様、教育においても、「科学」らしさを装った「脳科学」が、地道な取り組みや検証を回避するための、思考停止の道具になっていないでしょうか。☞

イラスト ひらた ゆうこ <http://rakugakiya-yh.com>

音楽のおくりもの vol.1

東日本大震災 復興への願いを込めて

子どもたちのメッセージが、合唱曲になりました。



子どもたちの詩によるエール

みんなはひとつ

- 東日本大震災 復興支援 CD 付き曲集「地球となかよしメッセージ」より
- このピースの収益は、震災復興のための寄付とさせていただきます。
- 定価：1,260円(本体1,200円+税)

【お問い合わせ】
教育出版株式会社 編集総括部 TEL03-3238-6862

ほっとな
出会い

NPO法人「カタリバ」代表理事

今村 久美 さん

さまざまな人との出会いが、
意欲のもとになる

「カタリバ」を創設したのは、大学4年の時。大学に進学して初めて、さまざまなバックグラウンドをもつ人たちと出会い、いろいろな考え方に触れたんです。堂々と意見を交わし、自分なりの問題意識をもって物事に取り組み、こういう人たちと関わることで、自分も意欲的になれることを実感しました。

「自分に価値がないと思う」と思う高校生が6割以上、「将来が不安」は約8割という調査結果があります。多くの中高生は、学校以外の人、身近な環境以外の人と出会う場が少なく、閉じられた環境にいて、自分を見つめ直し、何かをなそうという動機をもちにくい状況です。出会ったことのないものに触れることが、発起する「きっかけ」になる。そんな場を教育に取り入れることで、学校でのキャリア教育を引き立たせられるのではないかと。親や先生、友達という縦横の関係ではない、「ナナメ」の関係として、少し年上の先輩が、子どもたちに自分の興味や失敗した過去などを語り、興味のある分野や、進路についての悩みを引き出し、将来を前向きに考える動機づけとする。これが、カタリバの活動です。

※(財)日本青少年研究所「高校生を中心とした健康に関する調査」(2011年)、「中学生・高校生の生活と意識」(2009年)

多くの価値観に触れることの意義

カタリバの創設から12年。活動を続けてきて、近年、子どもたちの家庭環境による階層化が進んでいるように思います。同じような属性の人としか交わらない結果、人との衝突を恐れる傾向が強くなっている気がするんです。

いろいろな背景を背負っている子が、一つの課題に取り組みような機会が、失われてきているのかなと。つながりたい人とのみつながる、見たくないものを見ずに大人になる。そうして、不条理なことがたくさん待ち受けている社会に出たときに、自分で道を切り開いていけるのか。自分にとって当たり前のことが、他の人にとってはそうでないことも多い。いろいろな立場の人との関わりのおかげで、それを学んでいくことができるのではないのでしょうか。教育を学校に丸投げするのは、大人として無



責任ではないか。多くの大人が子どもに関わり、多様な価値観、自分なりの生き方を子どもに見せることで、生き抜く力は育っていくのではないかと。地域社会との関わりを大事にする学校もふえています。カタリバも、その一助になればと願っています。

自分の価値を信じることの大切さ

震災後、宮城県女川町、岩手県大槌町の教育委員会や学校、地元の学習塾の先生と連携した「コロボ・スクール」をつくりました。被災地で多く聞かれたのが、子どもの教育環境を心配する親御さんの声です。教育環境がどうなるかということが、住民がその町で暮らしていく軸の一つです。子どもが落ち着いて勉強でき、悩みなどを打ち明けられる「居場所」が手に届くところにある環境。その一端を担っています。

「コロボ・スクール」では、達成感を味わえるプログラムを組むように配慮しています。何もかも失ったなかで、勉強への意欲がわかない、将来のことに投げやりな状態の子も多かったんです。希望をもたせるものは、何よりも自己肯定感の回復。大人もそうですが、自分に自信をもつことで、これからの生活を、前向きに考えることができます。

「カタリバ」の活動と、根底は同じです。自分はこのにいていいんだ、無価値じゃないんだと。自分が自分のことを認めて、自分の存在価値を感じ、将来を見つめる。そんな実感をもてる場所を提供したいのです。

いまむら 久美 1979年岐阜県生まれ。慶応義塾大学環境情報学部卒業。2001年「カタリバ」設立。全国約600の高校でキャリア教育を展開。中学校にも活動を広げている。東日本大震災を受け、放課後学校「コロボ・スクール」を創設し、女川向学館」と「大槌臨学舎」で継続的な支援を行っている。2009年内閣府「女性のチャレンジ賞」受賞。慶応義塾大学非常勤講師。NPOカタリバ <http://www.katariba.net/>

Educo Salon

前号について寄せられたご感想です。

◆巻頭インタビューの益川敏英先生の言葉、「こういうやり方をしちゃいけないという成功例」は今ではわからない、ということがその時にわかった」は、全ての子どもたちに伝えたい、すばらしい教えたと思つた。それが、前向きに、そして何事にも積極的に取り組もうとする子どもへの育成につながると思う。〈北海道 武田隆雄〉◆沖縄県南城市大里中学校の「ふるさと伝統芸能まつり」は、生まれ育った地域のよさを再発見する、大きな取り組みだ。各支部の練習風景での真剣なまなざしと笑顔には、伝統を受け継ぐ自覚と喜びがあふれている。次回の「ふる伝」をぜひ見にいきたい。〈北海道 飛鷹保廣〉◆四日市市教育委員会の環境教育や、八戸市教育委員会の地域の協力など、いずれも豊かな企画力と連携の視点に立った、力強い実践の連続で、頼もしく、共感いたしました。「地域」は、まさに最大の教育環境です。〈山形県 佐藤進〉

なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命のびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。

わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。